



広告 講演内容がWebで!! 『内部統制とITフォーラム』ITの果たす役割とは? NIKKEI

広告 [特集]世界をリードする心臓・血管医療 提供 東芝

広告 ◆オープン化粧品◆業務システム連携で在庫と物流コストが約30%減-富士通

広告 7月21日(金)SAPビジネス・シンポジウム'06 ジェフリー・ムーア来日講演決定

ビジネス: ネット時評(日経デジタルコアより)

更新: 8月30日 07:00

不思議の国ニッポンのメディア進化(中村伊知哉)

成田からミネアポリスに向かう機内にてこれを書いている。空港の出国ゲートの行列がいつもよりうんと短い。7月から出国カードが不要になったからだそうだ。規制緩和なのだろうか。行列の中から、手間も時間も省かれてよかったという声が聞こえる。だが私は、この国は出国に際してなぜそんなものが必要なんだろうとずっと思っていたので、ちょっとした正常化にしか見えない。ふと気づくヘンな仕組みがまだたくさんあるような気がする。



■ネットが与えた権力パワー

少し前、とぼとぼ町を歩いていると、電気屋さんの前に人だかりがある。街頭テレビのようだ。大相撲でもやっているのだろうか。のぞいてみると、ワイドショーで国会中継をしていた。国会中継に人だかり。動乱の途上国のようだ。ワイドショーで政治。国家元首の下半身スキャンダルでもあるまいし。いったいどうしたんだろう。

その少し前、村井純さんから、官邸のメルマガは広告媒体としても恐ろしい効果があると聞き、申し込んでみた。加入者が200万人を超えているとある。確かに恐ろしい。インターネットは市民に声を発するパワーを与えたが、同時に権力にもパワーを与える。

政治と市民の結びつきが強まることは、民主主義が深化する喜ばしい事態なんだろうか。それともこれは、日本は民がなんとか凌いできたから政治が引っ込んでいられた幸せな国だったのに、とうとう政治が前面に出っ張らないといけなくなってきた危険な兆候なのだろうか。

テレビやインターネットは何を助長しようとしているのだろうか。にわかに把握しがたいことが社会の奥で動いているような気がする。

■虚構を演じる? 庶民

その少し前、息子が英語の試験を受けた。試験官が、日本文化についてどう思うかと聞くので、コンビニや自販機がたくさんあって面白いと答えたところ、げげんな顔をされたという。恐らくその官は、大相撲や歌舞伎を念頭に置いていたのかも知れない。せいぜいアニメやゲームが回答の許容範囲だったのかもしれない。

だが、アメリカにしばらく住んで帰国した小学4年生のアンテナにしてみれば、街角の突き抜けた不思議さがまず目につくのは素直なところだ。アニメやゲームはアメリカにもあるし。

MITのデザイン系の学生を日本に招いた際、成田空港の自販機を見て大喜びし、缶ジュースを片っ端から買うので、荷物が重くなって困ったことがあった。クーっとか言っている表情のキャラクターのデザインが画期的にヘンだ、

なんじゃこの国はと言って興奮している。

そこから東京に向かう途中、彼は道沿いに立ち並ぶお城のようなラブホテルを見て、その用途を聞いてまた興奮する。安土桃山文化の豪華絢爛は理解できるが、奥ゆかしい日本人なら隠すであろうその機能を、なぜあのように堂々と。あるいは照れ隠しのための虚勢か？などとブツブツ言っている。

もっと豪華な日本を見せてやる。そう考えて六本木のパチンコに連れていった。彼が1000円つかって3万5000円も勝ったので私は驚いた。しかし彼が驚いたのは、換金システムだった。陳腐なメダルのようなものを店内で受け取り、裏に回って小窓に出すと現金が出てくる。

規制されたシステムをすりぬける仕組みを、庶民みんなが暗黙に了解していて、演じている。豪華の裏に隠し事をしている。安土桃山の茶の湯のようなものか？ここは庶民が虚構を演じる国民劇場か？などとブツブツ言っている。

■どことなく違うメディアの発達

いい歳をした大人が電車でマンガをむさぼり読む。子供は引きこもってゲームに興じ、おかあさんたちはランチタイムにカラオケボックスだ。そんな国民訓練を積んでいる不思議な国では、メディアの発達もどことなくよその国とは違ってくる。

とぼとぼ町を歩いていると、ケータイを手にする人が多いのに気づく。耳に当てているのではない。手にして、目の前に持ってきて読んでいる。あるいは、何やら親指で書き込んでいる。どこの国でもケータイはまだ耳と口のためにあるが、この国ではケータイは目と指のための、読み書きの道具のようだ。

そんな特異な進化は、この国の不思議さから見れば当然のことなのかもしれない。私が住んだことのあるアメリカもフランスも、どちらもとってもヘンな国だと思うが、日本もそれに負けず劣らず、深くて不思議な国だと思う。もっともっと説明不能なメディア進化を遂げていてもらいたいと期待する。

ー筆者紹介ー

中村 伊知哉(なかむら いちや)
スタンフォード日本センター研究所長



略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメディアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。

● 記事一覧

- 労働力不足とロボット社会(築地達郎)
- 通信市場の「ジレンマ」——光ファイバー普及、市場集中を誘発(今川拓郎)